第百三十四回　国語教壇修養会資料

教式の話　第三次指導

笠原昭司先生「かさこじぞう」

第三次指導の御教壇から

本日の研修会で「教式の話　第三次指導」のお話をなぜ引き受けたのかと本日の内容

1　現在の国語教壇修養会では会期の関係から第三次指導まで行える時数が取れないため実施されないことが多い。

2　芦田先生や鈴木先生は、第三次指導について第二次指導までで形式の取り扱いは十分に行っているの必要とされないお話をされている。

3　笠原昭司先生は、「かさこじぞう」の第三次指導を古川市立宮沢小学校で「漢字」と「文章」で二時間指導された。

私は、先生の御教壇から「こんなにも深く教材を読み込み、漢字一字やひとことの言葉を自在に使い児童の読みの世界を広げられているのか。」と驚くばかりであり、何とか皆さんに伝えられないかと思い今回引き受けた。

4　ここに取り上げた第三次指導は、昭和六十三年一月四日から六日まで古川市立宮沢小学校で開催された第九十五回国語教壇修養会終了後、一月十一日に漢字で一時間、一月十二日に「地蔵の恩返し」の部分を文章で一時間指導された教壇記録の一部である。

本日は、発表する時間を考え、手引から六とくの教壇の様子を中心に録音テープ（カセットテープ）から抜粋して掲載している。

いずみ会の資料として「地蔵の恩返し」は、笠原昭司先生著「教式の話ー国語科指導の単純形態を求めてー」五十二ページ○文学機構と板書機構に記録されている。また、漢字の指導については、「国語科指導の単純形態を求めてーいずみ会百回記念誌ー」九十三ページから九七ページに記録されている。

5　第三次指導の教式の流れや内容については、「教式の話」や「教壇記録と講話」に詳しく書かれており、ここでは、笠原先生の宮沢小学校での御教壇の様子をテープ資料にて聞いていただく。

6　笠原昭司先生著「教式の話ー国語科指導の単純形態を求めてー」からの引用文には「教式Ｐ25」のように表示した。

第三次指導について

○ **定着させるために**（教式Ｐ76）

教式は、第一次指導が概観、第二次指導が重要なところを、第三次指導が形式指導になっています。なぜ形式指導が第三次なのか、それは、第一次で文章の概観をし、第二次で文章の心をつかんだあとで、心は、このような文字・語句・文章構造に表れているんだなと、文の真意を味わうための、形式指導だからです。

○ **漢字のはたらき**（教式Ｐ76）

漢字・語句が読めたからといって、文章が読めるかというと、そうではないのです。そのような読みは、文章の字面が読めたにすぎないだけのことです。

漢字が文章の中でどんな働きをしているのか、どんなふうに生かされて使われているのか、漢字は表意文字ですから、漢字のもっている意味が、文章の中で、どういう意義づけがなされているのか、文章の中でどのような位置づけをされているか……それを扱うことが大事なわけです。

第三次指導第一時（漢字の指導）

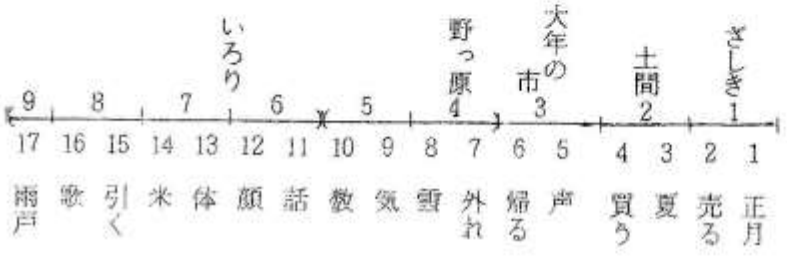
○ 今日は、漢字の勉強をします。

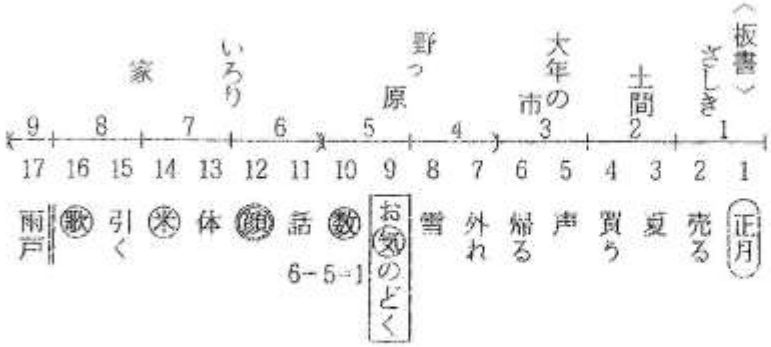
三　よむ

四　かく

○ みんなは、ノートの一番上のますに1と書いてください。下はそのままにして、次の行に2と書きます。その次の行に3と書きます。4・5…17まで書いてください。

先生は、番号の下へ漢字で書きます。みなさんは、先生の書いた漢字をみてひらがなで書いてください。





六　とく

○　これはちょっと、ずっと（漢字）を見て考えていきます。

○　おじいさんという人おばあさんという人どんな心を持っている人だか、ずっと勉強してきて分かったでしょう。どんなおじいさんだと思う。

やさしい人。

○　優しい人だと思うでしょう。おばあさんもそれと同じように心の優しい人なんだと思う。おじいさんの心の優しさが分かる漢字はどれ。

正月です。

○　お正月さんがせっかくおいでになるのに、もちこを用意しないでおったら、せっかくおいでになるお正月さんに悪いなあと思う気持ちは、おじいさんの優しい気持ちなんです。お正月様というのは分かりますか。みんなの家ではどこへお迎えするのかな。

神だな。

○　お正月様というのはね、歳を一つ持って来てくれるの。お正月様が来ると今まで五つだった人は六つになるの。お正月様は歳を持って来てくれるの。

もう一つお正月様はいいものを持って来てくださるの。今年はうんと米や畑のものが取れて幸せになるようにというので、お正月様は幸せを持って来てくれる神様がお正月様。それをちゃんとお迎えしなければならない。

お迎えするのに何もなくてなあと思うおじいさんの気持ちというのはとても優しいところ。

もう一つここの中でおじいさんの優しい気持ちが分かるのはどれかな。

気です。

○　「気」これは見つからないんでないかと思ったらちゃんと見つけてくれたね。下にこういうのが付くでしょう。（気の下に「のどく」と板書）、上にはこれが付く（気の上に「お」と板書）

○　雪をいっぱいかぶったお地蔵さんを見て「気のどくだなあ」と思って、そして、いっぱい積もった雪をはらってあげた。はらってあげただけでなくってもう一つやってあげたの。何をしてあげたの。

かさこをかぶせてあげた。

○　かさをかぶせてあげた。かさをかぶせてあげた時におじいさんえらい困ったことがあったの。どれで困ったのかな。ここに書いてある字で困ったの。

数です。

○　数ですね。かさはいくつあったのだったのかな。

五つです。

○　五つです。お地蔵さんは何人いらっしゃったのかな。

六人。

○　六人。六引く五では一つ足りないの。一つたりないんだよ。こういう算数で六引く五で一足りないの。足りないのは何で間に合わせたのだったかな。

おじいさんがかぶっていた手ぬぐい。

○　おじいさんのかぶっていたつぎはぎの手ぬぐいをやって間に合わせた。そうやって、かさから手ぬぐいまでみんなお地蔵様にやってしまって背中には餅背負って帰るはずなのに、餅を背負って帰らないでお家へ帰って行ったら、たいていのおばあさんだったらどんな顔をするかな。何にも持ってかえらない。

いやな顔。

○　いやな顔するでしょう。おじいさんはせっかく行って何も持たないで帰ってきた。ところがこのおばあさんは、やっぱり心のやさしいおばあさんだった。

どんな顔しておじいさんを迎えたのかな。

いやな顔ひとつしないでおじいさんを迎えた。

○　いやな顔ひとつしないで迎えた。そういうようなよいおじいさんとおばあさんだから、お地蔵様がいいことをしてくれたの。今まで聞いたことのない何をお地蔵様から聞かせてもらったのかな。お地蔵様から。おじいさんとおばあさんは。

歌です。

○　歌を聞かせてもらいました。お地蔵様の歌なんてめったに聞かれないんだよ。

もう一つはそりを引く声も聞かせてもらいました。

○　それだけじゃなくて、雨戸の所へ行ってみたらね何がいっぱいありました。

お正月に使うもの。

○　お正月に使うものがどっさり置いてあった。大年の市に売っているものみんな持って来てくれたの。いいお正月を迎えることができたというお話です。

○　今日はみんなは漢字をひらがなで書いたでしょう。お家に帰ったらそのひらがなを見て、本を見ないで漢字なんぼぐらい書けるかやってみなさい。いいですか、みんな書ける人手を挙げて。ひらがなだけ見てちゃんと書けますという人手を挙げて。

お家に帰ったら、忘れないで、ひらがなの下にずうっと書いてみなさい。

○ **文章機構と板書機構**（教式Ｐ52）

手引によって書かせる文章は、板書する文章でもあります。ここで，文章機構と板書機構について述べてみたいと思います。結論からいうと、板書機構即文書機構であると言えます。

つまり、板書機構というのは、文章機構をわからせるために、教師が文章のなかにある文字・語句・文をえらんで組み立てたものであると言えましょう。二者の関係は次のようになります。

（一）文章と板書と同じの場合……全部書き
（二）文章からの抜き書き……文字の場合
　　語句の場合
　　文の場合
　　文図の場合

いずれにしても、全部書くよりは、重要なところを書かせることが、子どもによくわからせることができます。全部書くと重要なところがかえって具体的にみえない場合があります。

○ **板書機構**

板書機構は、文章をわからせるためのものであるとすれば、全部を書くよりは、文章の大事なところを具体的にわからせるための最小限度のもので構成すればよいということになります。全部書いたらわかるというものではないのです。

第三次指導第二時（文章の指導）

手引

今日はね、お地蔵さんの声をずっと書いて、お地蔵さんの声聞こえるところどこに書いてあるかわかりますか。

四十三ページ。

○ 四十二ページのおしまいのところに「じょいやさ　じょいやさ　と、そりを引くかけ声がしてきました。」というところ指で押さえてください。そこを書く。もう一つは、四十三ページお終いから四行目「六人の　じぞうさ　かさこ　とって　かぶせた　じさま　の　うちは　どこだ　ばさまの　うちはどこだ　と歌っているのでした。」それを一つ書く。

それから、じぞうさん　ずっさん　と下ろして行きました。」そこを書きます。それからもう一つは、「じょいやさ　じょいやさ　と、からぞりを引いて、帰って行くところでした。」

そのくらい書きます。少し数が多いけれどしっかり書いてください。

○ 指黙読　一回

指音読　一回

六　とく

○　お地蔵さんの声が四つ出ているけれど、この中でお地蔵さんの声でないのはどれだ。

ずっさんずっさん。

○　ずっさんずっさんというのは、これはお地蔵さんの声でないでしょう。これ、間違ってはいけない。あとはお地蔵さんの声。これは（前の「じょいやさじょいやさ」）お地蔵さんの声だけどどんな声だ。

かけ声です。

○　かけ声です。もう一つかけ声があるでしょう。お地蔵さんのかけ声聞こえるのはどれ。もう一つ。

じょいやさじょいやさ最後の

○　最後のじょいやさじょいやさもお地蔵さんのかけ声です。さあ、そうしたらこれは（六人の……）は、お地蔵さんの何でしょう。お地蔵さんのどんな声。

歌声です。

○　歌声です。お地蔵さんが歌っている声です。お地蔵さんの歌声とかけ声、かけ声おんなじかけ声で二つ出ているけれども、うんと頑張っているかけ声かけているのはどっちの方です。こっちの方（前）でしょうか。むこうの方（後）ですか。うんと頑張ってかけ声かけていのは。

前の方。

○　こっち側の方は、これはうんと力を入れて引っ張っているかけ声だよ。同じそりだけれども、こっちのそりは何か積んであるそり。

米とか粟とか。

○　米とか粟とか大根とかごんぼとかにんじんとかお正月に使う物がいっぱい積んでいるそりなの。こっちはどんなそり。

からぞりです。

○　からっぽのそりです。みなからっぽのそり、からぞりです。からぞりになったのは、どこで分かりますか。

ずっさんずっさん。

○　ずっさんずっさんと荷物を降ろしている音で分かります。これは声でなく音です。六人のお地蔵さんは、いっぱい荷物を積んで、おじいさんおばあさんへのお正月へのプレゼントをいっぱい積んでそりを引っ張って来ました。雪の中を引っ張って来ました。

おじいさんのお家をお地蔵さんは知っているのでしょうか。おじいさんおばあさんの住んでいるお家知っているのでしょうか。

知っていません。

○　知っていないの。知ってはいないけれどもさっきの餅つきの声がずーっと聞こえて来たから、たぶんあっちの方がおじいさんのお家だなと思って雪の中を六人のお地蔵さんはいっぱいプレゼントを積んで引っ張って来た。

○　おじいさんのお家のすぐそばにどんなお家があったのかな。

長者どんの屋敷

○　長者どんの屋敷があったの。うんと大きい金持ちのお家があって。おじいさんのお家はどんなお家なの。

小さいお家

○　小さいお家。雪がいっぱい降っているから、雪の中に半分位埋まって見えなくなっているんじゃないかな。お餅つきのまねごとの声聞こえればいいんだけど、お地蔵さんが動き出したころには、おじいさんおばあさんはどうしておったのかな。

寝ていました。

○　それで、お地蔵さんは歌を歌ったの。お地蔵さんはおじいさんの家を探す歌を歌ったの。探しているのが分かるのはどれ（板書を指して）

○　「どこだ」と探しているの。「どこだどこだ」と探しているの。それをお地蔵さんは歌みたいに歌いながら探している。おじいさんはおばあさんと一緒に寝床の中でその声聞いてびっくりしたんだ。

それで急いでずっさんずっさんと音のした所へ行ってみたら、いっぱいお正月の品置いてあったの。

○　こっちはだんだんおじいさんの家に近づいて来た。こっちはお地蔵さん、だんだんどうなっている。

帰って行く。

○　遠くの方へ帰って行く。おじいさんとおばあさんは、お地蔵さんと会うことできたでしょうか。

できなかった。

○　会うことできなかったけれども、お地蔵さんがずっと雪の向こうへ帰って行く後ろ姿を見つめておった。さあ、そのお地蔵さんから贈り物をいっぱいもらったおじいさんとおばあさん。次の朝は何の日。

お正月

○　お正月です。前の日は何の日。

大晦日の日

○　大晦日の日におじいさんがお地蔵さんを助けてやったら、お正月の朝のうんと早い時にお地蔵さんが贈り物を届けてくれたというお話ですね。

〈板　書〉

じょいやさ　じょいやさ

と、そりを引くかけ声がしてきました。

六人の　じぞうさ
かさこ　とって　かぶせた
じさまの　うちは　どこだ
ばさまの　うちは　どこた

と歌っているのでした。

ずっさん　ずっさか

と下ろして行きました。

じょいやさ　じょいやさ

と、からぞりを引いて、帰って行くところでした。

物語りの文

するとま夜中ごろ、雪の中を、

じょいやさ　じょいやさ

と、そりを引くかけ声がしてきました。

「ばあさま、今ごろだれじゃろう。ちょうじゃどんのわかいしゅが　正月買いもんを　しのこして、今ごろ引いて来たんじゃろうか。」

ところが、そりを引くかけ声は、ちょうじゃどんのやしきの方には行かず、こっちに近づいて来ました。耳をすまして聞いてみると、

六人の　じぞうさ
かさこ　とって　かぶせた
じさまの　うちは　どこだ
ばさまの　うちは　どこだ

と歌っているのでした。そして、じいさまのうちの前で止まると、何やらおもいものを、

ずっさん　ずっさん

と下ろして行きました。

じいさまとばあさまがおきて行って、雨戸をくると、かさこをかぶったじぞうさまと、手ぬぐいをかぶったじぞうさまが、

じょいやさ　じょいやさ

と、からぞりを引いて、帰っていくところでした。